



子供たちを私のもとへ来させなさい

# Viator

VOL.006

## 祝ヴィアトール祭

### ヴィアトール修道会と私

主任司祭 イブ・ボアベール

ヴィアトール祭おめでとうございます。

私がこの北白川教会に来てから、来年の3月でちょうど40年、司祭に叙階されてからは25年になります。17歳でヴィアトール修道会に入ってから、その大半の時間をこの教会で仕えてきたこととなります。しかし、北米やヨーロッパ、アジアのみならず、近年はハイチやブルキナファソにも活動の場を広げているヴィアトール修道会は全体が大きな家族のようなもので、この夏もカナダの修道院で世界各地からの会員たちと出会いましたが、初対面であってもすぐにうちとけて実の兄弟のようにふるまえるのは大変ありがたく、その恵にとっても感謝しています。

思えば私とヴィアトール修道会とのご縁はまさに神のお導きによるものでした。信仰篤い両親のもとで育った私は、幼いころから家にあったドミニコやドンボスコ、サレジオなどの聖人伝に親しみ、彼らのようになりたいという憧れを抱いて成長しました。

「聖秘跡 (saint sacrement) 修道会」の土曜学校にも熱心に通いました。8歳の時のことです。その修道会にはアフリカミッションがあり、ある日曜日の御ミサでアフリカでの宣教のことを司祭が説教の中で話されました。私は非常に感動し、神様が自分の心に「私に従いなさい。」と呼びかけておられるのを感じました。それ以来、寝ても覚めてもアフリカ、アフリカ、アフリカ…「神様、どうぞ私をアフリカに送ってください。」その一心で11歳のとき、同じ修道会の小神学校を志願しましたが、受験の当日病気になってしまい、試験を受けることができませんでした。絶望して泣く私に、母は「大丈夫、安心していなさい。神様はきっとあなたに一番よいようにしてくださる。」そう言って励ましてくれました。

公立中学に通うようになりましたが、当時はカトリックのモンリオール教区が学校の運営を任されていました。宗教の時間もありましたし、教師として派遣される修道士もとても多く、中学2年と3年の時にヴィアトール修道会のブラザーに担任をしてもらいました。私はこの先生をととても尊敬し、彼のような人になりたいと憧れました。それがヴィアトール修道会との出会いでした。

高校1年生の時、同修道会の黙想会に参加し、高校2年生になって33人の仲間とともに入会しました。通常は1年間志願者として共同生活を送るのですが、私の場合はそれを経ずに直接修練生活に入りました。22歳、モンリオール大学在学中に終生誓願をたてました。

幼いころからの夢だったアフリカミッションを希望した私に、当時の管区長は「日本に行ってください。あなたならできます！」そうおっしゃいました。

日本語はもちろん、英語さえ満足にできなかった私は大変とまどいました。そもそも日本という国に関する認識も、中国の隣の国、程度しかなかったのです。しかし私は5分後には「はい、行きます。」と答えていました。迷いはありませんでした。

主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい・・・」

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。 創世記 11. 1～4

この聖書の言葉がとっさに心に響きました。行き先さえ知らずに旅だったアブラムに倣いたいと思ったのです。日本に来てから日本語の勉強を始めましたが、フランス語を話すのはクラスで私一人だけ。授業は英語で解説されるので、英語もままならない私には理解できないことも多く苦勞しましたが、聖書を日本語で読めるようになることはとてもうれしく、つらい勉強もとても楽しみました。

その後洛星中学・高校で教えるようになりましたが、たった一度だけ、カナダに帰りたと思ったことがあります。70年代、学園紛争の嵐が日本中を吹き荒れていたころ、洛星も例外ではありませんでした。60人の生徒が暮らす寮の舎監をしていた私は荒れる生徒をうまく指導できず、連日連夜に及ぶ会議に疲れ果て、己が力不足を痛感し、一度帰国して一から学びなおしてまた出直したいと思ったのです。

そんなある夜、深夜過ぎによりやく終わった会議から戻ると、中学1年生のK君が私を待っていました。こんな真夜中に何が？と驚く私に彼は「あなたは司祭にならなければならない、なってください！」とだけ言って、自室に戻っていきました。

当時は10人も司祭がいましたし、そんなつもりは全くなかった私はキツネにつままれたようでした。それから2週間後、K君は運動場で私を見つけると駆け寄ってきて、「もう決心はつきましたか？早く決心してください。」とまた言いました。その日の夕食の時、私は食卓の軽い話題としてその話をしました。

すると当時校長だったナドウ神父さまの答えはただ一言「Why not?ぜひとも司祭になってください！」

ただちに上智大学神学部への入学手続きがとられ、司祭叙階後は2年間洛星で宗教を教えました。北白川教会へ司祭として来たのはその後です。すべて神のお導きです。私は安心して神にすべてを任せてきました。もちろんこれからもです。

現在ヴィアートル修道会はカナダでも召命が減り危機的状況ですが、ハイチやブルキナファソ、ペルーでは志願者が増えています。すべてよいように計らってくださる神に信頼し、みなさんとともに歩んでいきたいと思ひます。

## 洛北ブロック 聖体大会レポート

9月23日（月・祝）、北白川教会にてブロックの聖体大会が行われました。ブロック活動の2年目ということで参加者も増え、衣笠・西陣・小山・高野そして北白川より約150人が一同に会しました。

10時に始まった溝部司教様司式によるごミサでは教会ごとの共同祈願を唱え、また拝領の歌として前日、小立花神父様の指導のもとで練習した“アヴェ・ヴェルム・コルプス”を歌い、信徒の心が一つになって聖堂に歌声が響き渡りました。



ごミサに続き司教様からの「ご聖体」についての講話です。イエス様の時代からご聖体がどのように私たちに伝わったか、聖書をひもときながら、とてもわかりやすくお話しいただきました。



興味深かったのは、イエス様から直接教えられた「パンを裂く」という晩餐での式を弟子たちが伝承する中で、「イエス様がパンになるなんておかしいじゃないか」と疑問や異論をはさむ人が必ずいたり、晩餐で酔っぱらったりして「パンを裂く式」ができなくなるといったことが、いつの時代にもあったということです。

私たちは、イエス様の教えが最初に聖書に記され、それをもとに伝承していったと思いがちですが、実はイエス様の教えを弟子たちが必死になって後世に伝えようとして、そのために聖書に残した、ということが司教様のお話から理解できました。そうすると「パンを裂く式」（ミサ聖祭）がまた違ったものに思え、同時に聖書のみ言葉の重みをあらためて感じざるを得ません。【講話録

はホームページに掲載しています】

続く「分かち合い」では10のグループに分かれ、今聞いた司教様の講話について感じたことをグループ内で分かち合いました。初めて会う



方ばかりなので、お互いの交流も深まったことでしょう。

なお司教講話と分かち合いの間、子供たちは司祭館に集まって、シスターのご指導によりその日のみ言葉（5つのパン）にちなんで、聖書の時代のパンがどんなものか作ってみよう！とパンづくりに挑戦しました。いわゆる「種なしパン」ですが、焼きあがったパンを食べた子供たちの感想は——ひとこと「固かった・・・」と。



午後の交流会では、小立花神父&菅原助祭の名コンビによる、聖書にちなんだクイズやシスターの紹介コーナーがあり、一同ホールで大いに盛り上がりました。

そして最後のプログラム。今回は聖体賛美式があり、そして聖体行列が企画されました。準備に際し事前ミーティングに臨んだ神父様も「聖体行列は初めて」と言われていたくらいで、かつては地域ごとに行われたという聖体行列も今では珍しいものとなっています。今回天蓋（てんがい）は

西陣教会よりお借りし、花びらは時節がら希少なながらも各教会でなんとか集め、修道院のお庭の周りを一周しながら、聖体行列を行うことができました。

ブロック聖体大会は、ブロックの小教区に属する信徒が聖体のもとに一つに集まり、イエス様を頭（かしら）としてつながり、兄弟姉妹であることを確かめ合う大切な行事です。来年以降もぜひ多くの方に参加いただき、ご聖体に集う喜び、信徒どうしの交流の楽しさが広がることによって、私たちの教会生活がもっと豊かになるものと信じています。（典礼部）



## 堅信を受けて

5月19日河原町教会にて、大塚司教様より堅信の秘跡を授かりました。最初は、堅信の意味もよく分からず不安でいっぱいでしたが、勉強をしていくうちに、だんだん心の準備もできたかな、と思えるようになりました。そして、当日大塚司教様から聖香油で額に十字架のしるしをしていただいた時は、なんとなく強くなった気がしました。そのあと、たくさんの人から「おめでとう」と言ってもらえて、とてもうれしくなりました。最後に、この日の為に広島から来てくださった代母の福原有香先生と両親に感謝しています。ありがとうございました。

(中1女子)

僕は、堅信を受けて、自分が、変わったと思った所がいくつかあります。一つ目は、字の通り信仰が強くなりました。いままではキリスト教について特に何も考えずに、過ごしていましたが、堅信を受けるためのお説教などを聞いて、キリスト教の教えは素晴らしいものであり、とてもためになるもの、生きていく上で、とても大切な事だと思うようになりました。二つ目は、感謝の心です。今回、代父をして頂いた西尾先生にはとても感謝していますし、西尾先生から堅信のお祝いに頂いた物も大変素晴らしいもので、とても感謝しています。今回お説教をして頂いたポアベール神父さまやブラザー菅原さんなど、たくさんの方々にお世話になってとても感謝しています。三つめは、安心です。教会に行くと、不安だった事が無くなり、とても安心出来ます。このように様々な事を学べた今回の堅信はとても素晴らしいものとなりました。

(中1男子)



## 典礼部だより

主日の御ミサの先唱、案内係の当番を現在のグループ体制で御奉仕して頂くようになって約2年が経過致しました。以前は名簿の順番の当番が回り、約2年に1回くらいの割合でほぼ全員がこの御奉仕を果たしていました。どちらにも長所・短所はあるのですが、今回は半年に1回行っている勉強会で分かち合ったグループ制における感想・反省等をお知らせしたいと思います。

現在、先唱グループ10名、案内係グループ12名が順番にその務めを果たしています。先唱は御ミサで聖書の御言葉を集う会衆に伝える、そして共同祈願を唱える大きな役目です。日曜日に祭壇の上で、聖書と典礼を読むという単純な務めではありません。神様の御言葉を集う信者に伝える、朗読者の口を通して神様が語られるという神聖な務めです。そのため1週間、聖書の御言葉を毎日読み深め、主日の福音に向かう聖書朗読に備える霊的心の準備が必要です。(もちろん信徒全員がそうであるように)先唱グループの方々は日々その務めのため精進されています。時には心に大きな悩みを抱え「今の自分は祭壇の上で聖書を読むに相応しくない」とある期間、当番を辞されていた、それほど真剣にこの務めと向き合っておられた方もおられます。それぞれの方々が「先唱」という使徒職に対して、以前よりその責務の大きさの意識が強くなった成果だと思えます。理想は信徒全員が何時でも、そのような先唱当番ができるようになることだと思えます。当番をすっかり忘れていた、当日、神父様が慌てて先唱者を探す、というようなことがなくなったことも大きな一歩前進だと思えます。

案内係もその務めをすることによって、御ミサの神聖さをより深く感じる事が出来ました。教会を初めて訪れた方への配慮、心遣いの大切さと難しさを実感することができました。又、御ミサの遅刻に関しては、自分が遅れるというだけでなく、他の信徒の方々の祈りへの妨げになっていることを直に感じる事が出来、自分自身への反省へと繋がりました。又、頻繁に入り口で挨拶を交わすことにより、来られていない方への気づきが出来るようになりました。又案内係は2カ月に1回の割合でお当番が回ってきますが、毎回係が変わるより定期的に同じ方の出迎えの方が、特に新しい方や久しぶりの方にとって、安心感があるようです。

まだまだ反省点や改善すべきところはありますが、皆が使徒職という連帯意識の元、より御心に適った典礼となるよう、精進していきたいと思えます。先唱、案内係共に、一応2年の任期を目安にしています。信者の方の中で、この奉仕を希望して下さる方があれば、ぜひお申し出ください。心からお待ちしております。

